

「御救いを見たシメオン」

ルカの福音書2：25－35

December.21.2025

ルカの福音書2：25－35（パワポ）

Preface

この場面は、イエス様がお生まれになって、まだあまり日が経っていない時の出来事です。

イスラエルでは、子供が生まれて8日が経ちますと割礼を受けさせるようになっていますが、イエス様もその慣習を守るために、神の宮神殿へと行かれました。

するとそこに、聖霊によって告げられ、「メシアを見る」と約束を受けていたシメオンという人が、イエス様を見て、赤子のイエス様にお会いし、喜びの賛美を歌っている場面です。

イエス様がお生まれになった時、イスラエルはずっと昔から、全民族がメシアの到来を長い間待ち望んでいた時でした。

しかし、実際にメシアがいらっしゃっても、メシア・主イエス様がいらっしゃったことを誰も認識することが出来ず、喜びもしませんでした。

私たちが知っています通り、イエス様はベツレヘムのとある馬小屋でお生まれになり、イエス様を礼拝しに来たのは、イスラエルとは遠くかけ離れたところからからやって来た東方の博士たちと、また、野宿をしながら羊の群れの夜番をしていた羊飼いたちだけでした。

さらに、ヘロデ王は赤子のイエス様を殺そうとしました。

イエス様が公生涯を生きられた間、イエス様のいのちを狙い、イエス様を十字架刑に処した人々は、メシアを切望して止まず、イスラエルの民たちにメシアの到来を教え指導していた宗教指導者たちでした。

「なんでこんな皮肉なことが、アイロニーなことが起こるのか？」ということです。

「あんなにも待ち望んでいたイエス様に、なぜ、彼らは出会うことが出来なかつたのか」ということです。

「見ても分からぬ、聞いても分からぬ、触っても分からぬということが、なぜ起こるのか」ということです。

Part One

クリスマスは、この社会においても、一年を締めくくる一つの年中行事と言いましょうかイベントのようになっていると思いますが、教会においても当然ながら大きく大切な時節です。

私はクリスチャンホーム育ちではありませんが、小学生の頃、なんだかクリスマスになりますと心がウキウキし、誕生日以外にプレゼントをもらえる・期待できる日として待ち遠しくもありました。

妹と一緒に電車に乗って、一駅行った西新井駅にあるニチイというスーパーにクリスマスケーキを買いに行ったついでに、妹と二人でおねだりするおもちゃを見に、おもちゃコーナーに行っていたこと等が思い出されます。

クリスチャンになってからは、何かプレゼントをもらえる日とか、恋人とデートする日なんていう見当違いな思いは無くなり、ただイエス様の誕生を喜ぶ日になりました。

以前、一年に一回やっていましたクリスマス礼拝後の愛餐会も楽しかった思い出として思い出されますし、夜のオープン礼拝の時に開催したクリスマスダンスフェスティバルや、青年たちと一緒に準備したクリスマスグループ。

24日のクリスマスイブのキャンドルサービスに出席した後は、キャロリング隊と一緒に寒い夜空の中歌ったクリスマスキャロル。

そして、キャロリング隊を招いて下さったお宅での温かい美味しい食事などなど、クリスチャンになってからのクリスマスは、それ以前のクリスマスとは、その意味において全くもって違う感謝と喜びに溢れる時間となりました。

確かに楽しいんです。

クリスマスの本当の意味を知つてのクリスマスは、なんとな〜く浮ついた雰囲気に流されて、なんとなく過ぎて行つてしまうクリスマスとは明らかに違いました。

感謝があり、喜びがあります。

でもこれが、アドベント・待降節と称して、一か月間毎年過ごしていますと、なんだかいつの間にかあっけなく終わってしまうと言いましょうか、本当にそれだけでクリスマスなのだろうかというような思いが浮かんでくることがあります。

ただ何となく過ごしてしまう、過ぎて行つてしまうクリスマスになってしまってはいないうちだろうか、そういう危険性があるようにも感じことがあります。なぜなのか？

その最も大きな理由が、クリスマスを楽しむ方法・興ずる方法、クリスマスを理解する上で、もしかすると、最も大切なことにおいて、基本的なことにおいて信仰的ではないからなのかもしれないと思わされました。

シメオンのような視点と心持つがあるだろうかということです。

Part Two

2000年前当時のユダヤ人たちは皆、外的問題を、うわべの問題を、暮らしの中で起こつてくる様々な問題を解決する解放者としてメシアを待ち望んでいました。

イエス様が来たら、（イエス様と言ってはダメですね）、彼らにしてみますと、「メシアが来れば、ローマの圧政から解放され、イスラエルを迫害した周辺国家全てに罰を与え、昔のダビデ王朝の時に有していた政治的・軍事的栄光が回復する」と考えていました。

今日の私たちの生活に当てはめるならば、経済的な困窮や肉体的精神的な病や、または、おかれた環境や条件においてすべての難題が解決し、何の心配もなく、不安もなく、喜びだけがある環境と条件を期待していたということになるでしょうか。

もちろん、イエス様はメシアとしていらっしゃいましたし、私たち人類のすべての問題を解決するためにいらっしゃいましたが、彼らが期待したこととぴったり合わなかつたのは、すべての問題を解決する最初のカギが罪の解決だということを、私たち人間の罪の解決だということを看過、見過ごしてしまったというところにあります。

ですので、このクリスマスを迎えるにあたって、私たちがどんなプレゼントを期待し、どんな喜ばしいことを期待しているのかに関わらず、その何ものよりも、クリスマスを迎えるにあたって最も大きな最も大切な核心となる内容は、私たち自身が、誰よりも深く、年季の入った罪人であることを覚えること。

そして、罪悪を、罪過を、罪なる心を追い出そうと罪と戦って、血を流すまで抵抗しようとした時、シメオンが見たように、赤子のイエス様に御救いを見、啓示の光を見、栄光を見ながら感謝し、喜び、真に意味のあるクリスマスを過ごすことが出来るのではないだろうかと思うのです。

Part Three

私たちはともすると、「私のために、私のために、私のために来られたイエス様」と、独りよがりな、利己的な、自己中心的な、感傷にふけるような、自らの癒しばかりを求めるような思いばかりで、主イエスの誕生を思い巡らしてしまいますが、当のイエス様は、「私のために、私のために、私のために」ということとは一線を画する御思いでこの地に来られ、そんなイエス様に私たちは倣うようにと仰いました。

旧約聖書の申命記10章に行ってみると、主なる神様がイスラエルの民たちをエジプトの奴隸の身分から救い出されてから、何度も幾度にも渡って、繰り返しイスラエルの民たちにお命じになった内容があります。

申命記10：12－22（パワポ）

「あなたの幸せのために、神であるわたしの命令を守りなさい」ということです。

人にとって真の幸せとは何か？

人間にとって真実の幸福とは何か？

それは、主なる神様の御心に従うことだけれども、では、神様というお方はどういうお方なのか？

人をうわべだけで見ることはなく、えこひいきなさらず、賄賂を取らず、みなしごや、やもめのために裁きを行い、寄留者を愛して、これに食物と衣服をお与えになるお方です。

今、巷で話題の「日本人ファースト」なんていうことは、真逆のお方です。いつくしみ深いお方です。

恵みを施されるお方であり、哀れまれるお方であり、すべての人の幸せのために、神ご自身の全ての力を動員されるお方です。

自分のために他者を害するお方ではなく、ご自分の栄光を他者の被害の上に築くお方でもありません。

まことの神です。

なぜ、主なる神が、聖書の神のみが贊美をお受けになるのにふさわしいお方なのか？

まことの神であられ、唯一の神であられるからです。

ギリシャ神話を見ますと、人間が作った神々は、力は人間よりもあるかもしれません、その心は人間と何ら変わることのない、心狭く、自己中心で、気まぐれな神々の姿がそこにはあります。

私たちが信じる聖書の神以外の人間が作り出した神々は、人間が自分たちの姿を重ね合わせるかのように同じように作ったため、全くもって、その内容が人と同じです。

神だと言うのに、全くもって神らしくありません。

詩篇で言っている通りです。

詩篇 115：4-8（パワポ）

「これを造る者も、信頼する者もみな、これと同じ」です。

第一コリント 10：20 では、使徒パウロ先生が、「それら人によって捻り出された神々は悪霊であり、人に偽の神々を作らせようとする悪霊の仕業であり、またそれらの偽りの神々と交わる者は、悪霊と交わっている者だ」と言います。

「神らしい」という表現を使ったら失礼になるかもしれません、偽の神々が蔓延っている世界ですので敢えて使わせて頂きますが、神らしい神とは、その力においてのみならず、私たち人間側の自ら進んだ自発的な納得、降参・降伏を引き出させ、人間自ら進んで幾らでも喜んでその前に跪き、希望に満ちた白旗を揚げさせるような内容がなければなりません。

私たちの信じる聖書が教える唯一まことの神は、正に、そのようなお方です。たとえ、私たち人間の短絡さゆえに今は分からなかったとしても、後になって振り返った時に、私たちの納得と降参と白旗を引き出させ、しかも、喜んで、希望に満ち溢れながら、その御前に跪くようにひれ伏すようになります。

その恵み深い、知り尽くしがたく、極めがたい知恵と導きと、また哀れみによって、私たちに幸いな全面降伏をお与え下さいます。

その恵みと哀れみの深さは、表現し難いほどに、天地万物何をもってしても収めることが出来ないほどに、寛大な、寛容なお方です。

愛の章である第一コリント13章で、愛を表現する言葉の第一声が、「愛は寛容であり」と言います。

つまり、「神は愛なり」、愛であられる神は、寛容なお方です。

また、ガラテヤ書の御靈の実のその内容にも、「寛容」があります。

つまり、靈であられる神は、寛大なお方です。

Part Four

では、そんなお方が人の姿を取って、赤子の姿でお生まれになったことを祝うクリスマスとは何でしょうか？

唯一の主なる神様は、ご自身の栄光を、私たち人間を罰し、私たちを災難と刑罰へと引きずって行き、私たちへの裁きと恐れと災いとをもって確認させるのではなく、私たちの絶望と困窮と悲しみから救い出そうと、すべてのものをお造りになられた神自ら、私たちの真っただ中に来られ、私たちの悩み苦しみ弱さを背負い、私たちの罪の身代わりとなって、私たちに賜った恵みと救いをもってその栄光をあらわされました。

そして、これこそが、クリスマスを迎えるにあたって、私たちに求められる最も大事な姿勢ではないでしょうか。

私たちが、私たちの隣人を顧み、私たちのものを犠牲にしながら分け与え、苦難にある方たちを顧みることをもってこそ、クリスマスは光を放つんだと思います。

イエス様はそうであったからこそ、「すべての人を照らすまことの光」と聖書に表されているのだと思います。

もし、私たちが私たち同士、私たちの家族同士だけで喜び楽しむならば、もしかしたら、クリスマスに神様が体現された、表現された、籠めたその意味・意図・意思に至らないことに、反することになるかもしれません。

原理原則通りにするならば、クリスマス礼拝を献げた私たちがこの礼拝堂を出て行く時、着ている服から何から大切な所持品に至るまですべて取り、手放し、誰かの温もりになるために用いて頂く、誰かの痛みを共有し慰めるために用いて頂く、それが、クリスマスの意味なのだと思います。

そしてもし、それが出来ない、拒絶したい、断るならば、神の前にあって、自分のことだけに気を配る、すべてを差し出した赤子のメシア・イエス様の肉と血を食らうだけ食らって、ナプキンで優雅に口を拭き、どこ吹く風のような顔をして立ち去る、イエス様のみこころを露も思わない白々しい信仰者、または、靈的泥棒になるのかもしれません。

忘れられない、「そうあらばならない」と姿勢を正されるような言葉です。

Part Five

毎年、毎年、クリスマスのひと時を私たちは過ごします。

もちろん、喜ばしく素晴らしいひと時であると思いますが、意外とあっけなく、空虚に過ぎて行ってはいないだろうか？

もしそうであるならば、イエス様が来られたその意味、意図、意思とぴったり合わさっていない、一致していないからなのかもしれません。

「なぜ、プレゼントが無いのだろうか？ なぜ、この手に残っている物がこうも少ないのだろうか？ なぜ、私たちが世の中を生きていく上で世的に確固たるもののが与えられないのだろうか？」ということゆえに、私たちは貧しいと感じているのかもしれません。

イエス・キリストの贖いゆえに神の子とされ、実質上富んでいる、満ち足りる心を与えられているにも関わらずです。

「無念だ、納得がいかない、悔しい、やりきれない」と感じているでしょうか。

「イエス様を信じたとて、何の保証もない」と感じているでしょうか。

もしそうであるならば、幼子イエス様をその懷に抱いている父ヨセフと母マリアに向かって、聖靈に導かれて語ったシメオンの言葉通りのことが、私たちのうちに起こっているということになるでしょう。

ルカの福音書2：35（パワポ）

「それは多くの人の心のうちの思いが、あらわになるためです。」

神としてのあり方をすべてお捨てになったイエス様の前にあって、多くの人が、その心のうちにある貪欲があらわになり、利己心があらわになり、自己中心的な思いがあらわになり、自らの癒しばかりを求める、愛の無さと不寛容さが

あらわになり、神の御心とはあべこべに、赤子のイエス様にもどかしさを覚え、「何も無い、使えない奴だ」と無能力さを覚え、何の解決にもならないみすぼらしさだけを覚え、シメオンのように、赤子のイエス様に神の御救いを見、人を照らす啓示の光を見、神のご栄光を見ることが出来ない。

果たして、このクリスマス礼拝に集っている私たちは、しがない落ちぶれた貧しき元王族の両親の懷に抱かれた赤子のイエス様に、シメオンと同じように、御救いと、啓示の光と、栄光を見ることが出来ているでしょうか。

真のクリスマスは、私たちが、罪に染まっている利己心と、個人の貪欲と、自分のことしか考えない悪い習性から抜け出して、この日をもっと大きく、主が私たちのために来て下さり、罪悪から救い出して下さり、自分勝手さと、がめつさと、汚れたものと、空しいものから救い出して下さったことをこの身をもって表す時であり、そうしてこそ、クリスマスは、紛れもなく私たちにとつて喜ばしい日となるんだと思います。

そうでないと、ただクリスマツリーに火を灯し、楽しい集まりをし、賛美は歌えど、ただの私たちの内輪のパーティーにしか過ぎないことになってしまふ危険性をはらんでいるように思います。

闇を照らす光でない光は、光としての価値がなく、腐敗したところに蒔かれる塩として蒔かれないならば、その塩は、塩としての価値がありません。

「あなたがたは世の光です。あなたがたは地の塩です」と仰られたイエス様の言葉の体現に努めてこそこのクリスマスでもあると思うのです。

Conclusion

まだ、遅くはありません。

この年が過ぎる前に、私たちの周りを見回してみて、私たちが分かち合わなければならぬ人たち、私たちが気遣ってあげる必要のある方々に、私たちが神様に求める遥か以前に、私たちがその必要を認識する遥か前に、私たちがまだ罪人であった時私たちのためにひとり子イエス様をお送りになるために、馬小屋に生まれさせ、その方を十字架にかけ死なせた父なる神様の御心に従って、いや、その十字架が私たちに生み出して下さった神の子という栄光の、喜びに満ち溢れた救いの内容を覚え、キリスト者としての生き様をあらわす、そんな喜びのクリスマスとなりますよう願います。

その時私たちは、もっと深く、「クリスマスおめでとうございます。クリスマス感謝いたします」と口に出すことが出来るんだと思います。

どのような期待で、どのような考え方で、今私たち一人一人がこの場にいるのかは分かりませんが、この礼拝堂を出ていく時には、この御言葉を覚えて、シメオンには分かったイエス、ヘロデ王も、大祭司も、すべてのユダヤ人たちも分かり得なかつたイエス。

その違いをはっきりと認識し、確かに、当然のように分かり、恵みを着た者として、その力を着た者として、キリストを信じるキリスト者としての歩みを全うすることを諦めないキリスト者でありたいと、神のみこころに適う反応を行いを諦めないキリストにある勝利者でありたいと願います。

お祈りいたします。

祝祷：申命記 10：17-19